

中学校の赤屋根じゃ

一日遊んだ日暮れ方

皆が 赤く染まっていた

夕日をあびた雀たち

いつでも、どこにでもいる日本の雀——
つまりは、いつでも、どこでもで見る我らの子ども、わけて、路傍の、通りすがりの、大事な子どもたちにも、おとなわれらは、おとなの色彩を、つけてはならぬのに、目から、耳から、あまりに多くの、おとなの、あれや、これやが、よからぬ色彩を、また音響をさえ、強いているのではなかつたか——ラジオで、テレビで——いえいえ、子どもの世界にいるおとなわれらが、ほんの少しでも……。

さて、さて、私の夢、今のこの世に、ただ一つの楽しい夢、それこそは、早く、月世界に旅行して、昔も昔も大昔の、大々昔から、満月のまん中で、兎がついて、いるというお餅は、ずい分どっさりこと、つけているに相違ありませんから、あんまり欲ばって、みんなといわないで、半分ほ

どといっても、ほんとうにどっさりこと貰って、地球上、世界中の、いえいえ、日本のお子さん達へ、お土産にしたいこと、これ、ただ一つ。

よし、こればかりは、所詮かないっこのない夢の中の夢にしても、日本中、多くの幼稚園や、保育所托児所の屋根は、大い、美しい青屋根赤屋根でありますので、青雀か、赤雀か、たったの一羽だけでも、見えないものでございましょうか。

これこそ、もし、おとな私の妙な色彩を、大事なお子さんへ強いる事に、なりますでしょうか、おそろしや。それとも、万一、「そうよのう、結構な事でのう」

ど、どこかの、どなたさまかが、おっしゃっては下さりますまいか。(おとそかげんでもござりませぬ。昭和三十六年正月十五日。東京西片町宅にて)

庭

新庄よしこ

寒椿のところどころに花をひそませた低

い生垣のその中を、飛石づたいに歩いて行けば、いとも静かにつくばいに落ちる笥の水といった風流の庭。或いはずっと趣向をかえて芝庭の広く大きく、あちらこちらに人たけ程のたくましき松ばかり、それに添うかの如く手入れの届いたバラの、これも数は少なく、このとり合わせ濃緑と淡紅のなんと雄々しくも美しきかなと忘れられぬ。かくて庭のありさまは有名無名数知れず書いても書いてもきりのあるものではありません。今ここで私が申したいのはこういうのをいうのではなくて、毎日毎日幼児との心のつながりの深い幼稚園の庭のこと、全くかわりの無い人々からは、なあれんだとも言われそうな、ところがそうではありません。どちらの幼稚園でも園児のおるかぎり一木一草、枝を折ったら折ったで、草が生えればそれで、どんなき細なことでも人間の重大な成長の役目をここに見出すことが出来るので庭というものは保育室と同じ或いはもっと大切なところと思っております。

みんながそれぞれうちへ帰ってしまっからあとしばらくの間、お帰りの前には、紙きれは屑籠へ、砂場には蓋を、古タイヤ

は積み重ねてと一応かたづけのすんでいるあとを見廻つていきますと、今までの賑やかさが賑やかさだけに、人気の無くなった庭はみんなの遊びのありさまがしみじみと心に残り沈黙とでもいいたいとき、朝から電線ならんでいた雀の群が安心してか、餌などありそうにもないのに土をほじくっているのが目立つ位。さあこれからが先生としてのあとかたづけのときでありましょう。

ここは文京区小日向水道町という、まさしく名称のとおり土地は水が豊富でどこからか少しづつ湧き出ているのをよく見かける、そこで思いついたのは金魚やメダカを飼って小ぎれいなのも欲しいがまずは遊べる池の方がもっとほしいので、水溜りよりはいくらかましなというのを作ってみました。かたち整い水清澄というには全く遠く、元来子どもは水を好むそれに合わせて作ったもので遊び場としては願った以上の結果となりました。というのはひき蛙がここから出てくるのを見つけたのですからもともと棲家がこの辺にあったのでしよう、冬籠りが終りほかほか暖かい日がつづきますとつい浮かれ出てみなさん今年もや

つてきましたよというようにうっかりまかり出てきます。前々からいる長老格壮年達、中にはニューフェースもいるでしょうが、こればかりは絶対に関われには見分けたつきません。忽ち大きな金網を伏せられてしまい、押すなおすなの人だから、やれ足をのばした、口をあけた目をつぶったと見たままを言い合う、好みがわからないので勝手にきめて猫あつかいにし餌をなにかやりたいという、水はもうたくさんなのに小皿について入れてやる、こんなにも愛されているのに蛙はそれどころではない、手足を四方にのばし猛練習怠りなし、必至の努力も脱れきれずと知るや観念してばたつとうずくまってしまう、お帰りでみんながいなくなってしまうと蛙のいるまま金網はとりに残されてぼん立っている、先生はここで放してやるのでやれやれと、ゆうゆう池をめぐって帰って行きます。そのため幼児生活にはごく縁の深いおたまじゃくしの発生には事かかず天然自然の発育状態がそのまま見られるわけで先生も蛙をおろそかには思っておりません。これにもまして嬉しいことは、これから夏にかけて沢がにというか自然に出てくるので、体色は

よごれ白、浅水色がすけてみえるのは人間でいえば内臓でしょうか、大きいので二十センチ位、小さいのはあるか無いかの小粒でも見つけたら最後のがすことではありません。これもまた今年も時節が来ました。遊びましょうねとでもいうように池をまわりをさらさらと走って出る、これはすばやくてすぐ岩かげに隠れてしまうので必ず水槽にびびき二ひきと連れてきてガラスをとおしてその動作やら形やらをみて楽しんでおります。

こんなわけですから、このさきやかな池の周辺はいつも賑やかで、手をつっこむ、掬う、時には足首まで入ってしまった。さで、あきかん、木片等さまざまちらかっていますが、あの喜ぶ有様は、むしろこのままにしておいて明日のあそびに結びつけておきましょうという気になり、かたづけないことにしています。

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や……実朝の詠んだあのあたりを歩いて行きますと、山椿のふと見上げる目に真紅の花が胸をうつ、思えば幼い頃から大すきでした。岡本帰一のコードモノクニという幼稚園向の絵本が斯界を風靡し忽ちみんなの心を強く

とらえたものでしたがそれにもよく紅椿がとりあげられていろいろな絵図きえ今はつきり思い出される位、私はここに来てすぐ一本植えておきました。秋の中ばごろこれに蕾を見つけるとついこのそばを通るのが多くなり、枝先に三つもついではい花は咲かないのにとちぎり捨てて無慙さをその時はしらず、そのくせせせとこやしをやったりするのとの矛盾はあとから気がついて葉のつやがいいので手入れがわかりますよと植木屋にいわれて変な気持ちできました。二月ごろが盛りでつい先だってまで朝来みるとぼたぼたとたくさん地に落ちていました。晶子さんの歌 あさましく雨のようにも花落ちぬわがつまづきし一も椿と、一本の椿でもこんなに雨のように、落ちたら落ちたでまた一しほの風情で、あたりを明るく匂わせているのはこの花らしく、色のあざやかさと蕊の大きい大胆さからくる特長でもありませんか、朝登園してくるとまずこの落ち椿のところめがけて集ってきます。もめん糸で通して輪になげる画面は絵としては見かけますが、人数も二人か三人、今は昔の話になつてしまつたよう、幼稚園の人数ではちと無理な

そびでありましようか、せいぜいだ持つて手にしている、砂場に使う、ままごのちそう位のものでしょう。

ところで花はとるべからずの掟はおそれどちらの幼稚園でもよく守られており、それが身につくまでには先生のたまえない心くばりがなみなみではありますまい。この椿の場合、落ちたのはままごのちそうにしていい、木に咲いている時はいけないという、このけじめが三年児二年児の始めはどうもまだ納得できないのはありますまいかとその身になってみる時が度々あります。さすがに年長組はもう心得て見分けをつけ、その心配が無くなつております。こまできます経路として一例となれば幸い。挿木をしてよく根づいたバラが一本あります、やつと蕾が三つきましたのでこれが咲いたら年長組でも花好きの、きれいな好きの殊に女の子はわが物としたい切なる願いを知っていますし、花ときえ見れば。うっかりちぎつてしまいたい三年児、今まで度々古い経験をしていますので、さあこれが咲いたらどうしましよう先生達と相談しました。その結果そばに連れて行って一しよに見る、昨日あんなだったの

にもう今日は咲いたのねいい匂いね、大事にしましよう、これ何という色などと話しあうのをきりげなく然し変りゆくその様子を度々経験させました。いいあんばいにこのころが通じた見え、みんなも大切なものに思い大輪三つがかなり長い間みごとに庭を飾ってくれました。

砂場には蓋をした方がいいですよと開園当時学校の関係者から言われてそれからずっと七年ばかり今もつづけております。二か所ですから時には、ああめんどうなどひそかに思わぬでもありませんが、こうして今もつづけていくという、そこには止められない深いわけもあつてのこと、というのはどうもこの近所には猫が多くて肥つたの瘦せたの三毛や白黒丹下左膳と名をつけられた片目やら、お帰りでみんないなくなつたと知るや見て見ぬふりで横断して行くのが毎日のよう、ついうっかりして十姉妹の味をしめられたことも二度三度、けれども砂場ばかりは猫からの難を受けたことは一度もありません。始めに注意して下さった人の好意をしみじみ今更がたく思っている次第でございます。当番二人でこの蓋をしてから帰るといふ役目はきつと果し

ていますがこの当番、時には蓋の上に乗ってしまつて自分のからだの重さで適当にしない、ゆらゆらするのがたまらなく愉快そうで、見つければ一応はとめていますが、時には真ん中からめりつきそうなので、新しい板と取り替える用意はしております。

私のところでは泥のおだんご作りがたいへんはやりました。或る日、五、六本立ち並んでいる棕櫚の根もとにダンボールの箱がおいてあるのを見つけ、何かしらと思いがらかたづけようとすると、先生、それ誰々さんのおだんごがしまつてあるので……と言われあわててもとの通りにおきました。

このきっかけといえ、これはあとから気がついて思い出したのですが、去年の夏休みの終りころから私はブディングが大好きで不二家の素焼のあの白い容器がずい分たくさんたまつてしまいました。捨てるには惜し、使い道は無しでたまる一方なので、ふと砂場に持つていって使ってもらつたらと思いつき、毎日通うついでに運びましたらいいあんばいに適当に活用されて喜んでいました。その中にこれに砂を入れて板の上に逆さに伏せて、そこには幾つもの

くつも同じかたまりが並び、これを互いに売ったり買ったり、掌にのせてみたり、こまではただ砂場での砂あそびでありました。その中多少の崩れを泥で補つてゆく中にだんだん堅いおだんご作りに変化してしまい、ただもう毎日毎日夢中で、手頃の大きさから豆粒位の、円いのか角目もの、赤れんがを丹念に時間をかけて粉にして交ぜたり、水で堅めたり、始めの頃は年長組だけでしたが、いつの間にか全園児の遊びとなり、この打ち込んだ姿を見ていますと、なまじ先生の計画の仕事の中に引き入れるのどうかしらと迷いそのなりゆきを見守つて終る日もありました。

おそろしいまでのこの流行には全く考えさせられてしまい、よそではどうかしら、うっかり話して、あなたのとこ、遊具が足りないんじゃないのとは出されなくとも、そんなひけめを感じ、しかし備えるべきは備え、粘土も十分買つてあるし、何もひがむこともあるまいとある研究会で思い切つてこの様子を話してみました。ところがうなずいて下さつた方々も大分あり、では私の所だけでは無かつたのかとまずまず安心したようなわけでございま

した。中には土を買つて、大きく掘られてしまつた穴をうずめられたそうで、そういうば、花壇やら木の根っこやら方々に穴があいているのを見つけたものでした。そのできたおだんごを、大そう大切に思い、草のかけ、物置のすみっこ、水道の流しの下などにひそかにかくしておくのでこのかくしておくというのが、またたまらなく楽しさを一段と加えるらしいのを知りました。

このように自ら工夫し努力するという経過を先生は貴く大切に思うのですが、家はこの泥のよこれを持ち込んで、お母様が何と思われるやら、これが心配で折をみて了解してもらいましたが何分あつかうのが泥なので、お帰りの時は時間をかけて必ずよく手を洗い、ひびクリームをつけてからにする習慣にしました。

都内の路は殆んど舗装されていて、一帯に泥の面が少ないので、土に対する魅力ということもひそんでいゝるのではありますまいか、或いは砂だけの粘土だけのとはまた違つたあつかひの自由さなどがこんなあらわれになつたのでしようかと考えてもみました。

春日麗々、桜も咲きしだれ柳も裏葉色に

そよぐ四月からはどうなりましようか、遊びもがらりと変るかもしれません、気を付けて見ることにいたしましょう。

(大日坂幼稚園)

幼稚園教育五十年

の旅路の感想

林 叔子

私が幼稚園というものの味を知ったのは、十九才の時でした。師範教育を一か年うけて小学校へ奉職、二か年の義務を終えて、再びもとの巣にかえりましたが、そのころの幼稚園の実際が、私に不安をいだかせました。幸に、大正六年四月東京女子高等師範学校保育実習科に入學出来ましたので、専心、幼児教育の勉強にはげみ、故倉橋惣三先生、故安井哲子先生、特別及川ふみ先生には御指導いただきました。修了後現在に至っておりますが、いつも私を引っ張って、支えている、太い、強い三本の綱があります。それは次の綱です。

1 故倉橋先生が私に金言を下さいました。「馬車馬になって進むことだね」と、お

っしゃいました。私の進むべき方向を御指示くださったのだと、ほんとうにありがたく思つて、今もなお、守りつづけております。耳を覆つて、わきみをしないで、周囲のものに気を奪われぬように、物を正しく判断し、しっかり地に足をつけて、的をしつかり見つめて、真実込めて進むようにとのおさとしてした。

2 故久留島武彦先生からは、「あなたは、感謝の二字がほんとうにわかつていますか。感謝は、嬉しい時、幸福な時には、誰も感謝するけれども、ほんとうの感謝は、苦しい時、失敗した時、人にわるく言われた時にこそ感謝するのですよ。苦境に立った時、また一勉強だ、磨をかけるのだ、天が与えた試練に勝つことだと、意気を盛り上げ、困難な事情を切り抜けてこそ、人間として生き甲斐があるのですね」と勇気づけられたことでした。

3 実母宇式かんの踏破して来た幼児教育の道をたどつて歩き、更に新しい天地を開拓することが、私のつとめであるという責任感と意欲。
昨年十二月二日に本園創立五十周年記念

祝典を挙行しました。幸に、明治四十三年七月一日開園当初から現在まで五十周年を重ねた今日もなお健在で、幼児教育の第一線にはたらかせていただいている事は、大きな感激です。はげしい、移り行く社会情勢の中に動きながら、変遷の波に乗つて漕いで来た私立幼稚園経営の苦心、幼児教育、小学校教育の思潮ならびに指導の傾向など、到底僅かな紙面に綴り切れるものではありません。五十年の昔から近代まで、幼稚園の姿は、どのように変遷して来たか、どのように発展して来たか、また進展をばばんでいるものはどんなものか、服装や髪結び方は近代型でも、考え方や指導法において、古い殻を身につけていては、役立たないではないか、かびの生えたもの、さびているものを用いてはいないか、常に磨くことを忘れてはいないかしらなど、さまざま反省と新しい息吹きに燃えるものです。

経営管理についても、教育の内容ならびに指導法においても、時代の思潮につれて次々と変わってきました。保育案のつくり方、指導の傾向など、ならべたてたら、さげんがありません。長い間歩いて来た幼